

熱、諍い、ダイヤモンド

著：Paul Farmer
訳：岩田 健太郎

「PのためのO」を主張し、果敢に問い続けた ポール・ファーマー

わたしがポール・ファーマーを初めて見たときから数えておよそ二十有余年が過ぎた。四〇歳だった彼は、六〇歳を少し越えたところで突然、帰らぬ人となった。五歳ほど年下で、当時三〇代半ばだったわたしも五〇代後半となった。

今でこそアフリカをはじめとする貧しい国でもエイズ患者に対する治療が普通に行われているが、二十数年前の状況は違っていた。そうした状況を数人の仲間とともに変えたのがポール・ファーマーだった。

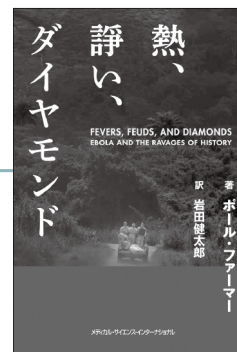
その頃のポールは、十分に若く、格好よく、そして過激に、「貧困者の医療」を巡る言説に挑戦していた。それを彼らは「PのためのO」を巡る闘いと言った。「P」は貧困者を、「O」はオプション、すなわち「選択」を意味した。

当時の世界は、少し大袈裟な表現を使えば、感染症対策を巡って幾つかの混乱あるいは対立があった。もっとも大きな混乱あるいは対立の一つが、アフリカやハイチをはじめとする貧困国でエイズ治療を行うべきか否かというものであった。主な公衆衛生専門家たちの主張は、年間一人当たり約二百万円もの費用（当時のレートで）を必要

とするエイズ患者に対する治療は、貧困国には経済的に無理であり、また治療中断による薬剤耐性ウイルス出現の可能性を考えれば、悪でさえあると言った。現場の多くはその言説を信じ、アフリカやハイチでエイズ予防と啓発活動に邁進した。その結果、先進国のエイズ患者は効果的な薬で有効な治療が受けられる一方で、貧困国の患者は治療から取り残された。それを誰も不思議だと思わなかった。わたしを含めてである。そうした言説に真っ向から挑戦したのが、ポールだった。

それはまさに「貧しいもののほど最高の医療を受けることができなくてはならない。慈善が支える医学はしばしば、古くて利用されなくなった医療—残り物の医療—を少しずつ分配することで成り立つ」という彼の言葉そのものの実践だった。

経験豊かな公衆衛生の専門家は、そうしたポールらを「無謀な医師」と呼んだ。そんな専門家を「彼らは僕たちを無謀と言うけど、僕たちの頭がおかしいってことは知らないんだ」と笑い飛ばしていたのもポールたちだった。そしてその後数年で世界は変わった。もはや、貧しいというだけで、エイズ



MEDSi
4,950円(本体4,500円+税10%)
A5変/564頁
ISBN978-4-8157-3044-4

治療を受けることができない状況を許容すべきだと言うものはいなくなった。できないとすれば、それは自分自身の問題であると。

*

本書の紹介が岩田氏からきた。久しぶりにポールの著作をじっくりと読む機会に恵まれた。そしてポールは相変わらず格好よかった。本書は西アフリカで2014年に始まったエボラ流行を題材にポールが書き下ろしたもののだが、ポールは果敢に「なぜ、集中治療が提供できないのか?」「ここはアフリカだからか?」「だとして、どうすればそれは克服できる?」と問い続ける。それは「PのためのO」の主張なのであった。国際保健を志す方々に一読をお勧めしたい。

(追伸:2022年2月21日、ポール・ファーマーは突然に六二歳の、その生涯を閉じた。「一人の人間が世界を変えられるんだ」と思わせてくれた人だった。ご冥福を祈ります。)

(山本 太郎:長崎大学熱帯学研究所)